

インドネシア河川環境視察報告

技術参与 土屋 信行

東アジア地域における河川環境施策を比較考量するためインドネシア・ジャカルタを調査した。首都ジャカルタは高層ビルが建ち並ぶ近代的発展を遂げた美しい都市である。年間降雨量は約1800mmで、水道や灌漑など利水には十分な水量に思えるが、有効活用できる開発水量が足りないため、民生用水も工業用水も不足分を地下水に頼っている。



[高層ビルで埋め尽くされた中心部]

そのため河口地域は猛烈な地盤沈下に見舞われている。これは高度成長期の東京の地盤沈下と全く同じ状況である。



[越流対策のため積まれた土嚢]

上の写真はジャカルタの中心地帯を流れる Kali Krukut 川の河口に位置するプリーットの海岸堤防嵩上げ工事の状況である。沈下のため緊急に積み上げられた土嚢で、応急の浸水対応をしながら、その外側に高さを積み増したコンクリート護岸を建設しているところである。コンクリート護岸を何度も積み重ねている事がよく分かる。

河川についても沈下を追いかけるようにコンクリート堤防（日本の特殊堤）を築き、さらに河床浚渫により流積を確保する工事が行われている。河川堤防についても、嵩上げによる応急対応で凌いでいる様子であった。



[河床浚渫工事、手前は嵩上げパラペット]



下流の都市部における水質は非常に悪いが、上流域の河川水は透明度も高く綺麗であった。河岸にはキャンプの出来るプレイスペースも有り子供達が課外活動をしていた。子供達が水に飛び込んで遊んでいた。



中流部ではテラス整備された区間も有り多くの市民が散策を楽しんでいた。(写真撮影、筆者)

今のジャカルタの現状は、高度成長期の日本と全く同じである。日本が辿ってしまった負の歴史を、インドネシアには辿ってほしくない。今こそジャカルタが日本の失敗を繰り返さないように、情報伝達をしなければならない。先を歩んだ私たちの責務は重いと感じている。